

広報広聴常任委員会（広報チーム） 行政視察研修報告書

【視察先】

兵庫県市川町（令和8年7月7日）

兵庫県神河町（令和8年7月8日）

【報告者】

委員長	池田 淳子	P 1 ~ 3
委員	森 昭人	P 4 ~ 9
委員	豊岡 健太	P 10 ~ 11
委員	岡山 栄蔵	P 12 ~ 14
委員	今宮 明	P 15 ~ 16
委員	佐藤 孝介	P 17 ~ 18

行政視察研修報告書

作 成 者 氏 名	池田 淳子
視察先・視察日	兵庫県市川町・神河町 令和 8 年 7 月 7 日・8 日・9 日
視 察 目 的	住民に読まれる議会だよりの編集を学ぶため
研 修 内 容	
【兵庫県市川町】 市川町議会は「いちかわ議会だより」として発行しており、164 号を数え、令和 7 年度第 40 回町村議会広報全国コンクールでは優良賞（第 10 位）を授賞。 編集体制は 6 名で、任期は 2 年とし、編集方針は「町民が参画する広報、手に取り読んでもらえる広報」を目指す、としている。そして、コンクールの審査基準を基本として編集に取り組んでいる。6 名の委員全員が 1 期目ということには少々驚いたが、事務局のサポートが充実していることに加え、委員長の熱く強い思いが伝わってきた。研修では司会や説明などそれぞれの委員が役割を分担され、丁寧な対応をいただいた。 特色としては、コンクール審査方針が編集の基本となっているとのことで、「全てを伝えるのは無理という前提を忘れない」という説明に納得できた。また、住民の関心が高い議案などを優先的に掲載している。また、住民参加の広報づくりを心がけ、日出町も同様だが、インタビューや一言コメント、表紙写真、題字も町民に参加してもらっている。ただ、表紙写真は、町民から募集を行っており、応募がないときは委員が撮影に出かけるなどしているとのことだった。 日出町と大きく違う点は、広報委員でない議員（各委員会の委員長など）も委員会ニュースの作成に携わっていること。また、委員会の回数が多く、綿密な打ち合わせが行われていると感じた。	
	

【兵庫県神河町】

神河町議会の広報特別委員会として設置され、委員は6名。改選後、間がないが委員長・副委員長とも1期目の議員が務めている。

「議会だより かみかわ」として発行され、令和8年5月の臨時会分で第89号を数える。令和6年7月に全面リニューアルを行っている。令和7年度 第40回町村議会広報全国コンクールでは「奨励賞 言語文章部門」を受賞している。

リニューアルのきっかけとなったのは

①議会だよりが読まれていない

商工会会員へのアンケートで「毎号読んでいる」と回答したのは0人だったこととのこと。

②議会が身近に感じられない

・議員の活動が見えない

・議会だよりを発行しているのに議会の活動が伝わってこない

③内容が難しく理解しづらい

行政・議会の専門用語は一般の町民は分からない

といった3つの課題が確認できた。

上記3点を踏まえ、親しみやすさや読みやすさを重視した紙面へとリニューアルされた。

表紙写真は町民が写っている写真を使用していて、特に子どもの写真を使用すればその子の親族が読んでくれる。題字も町民から応募を行っている。

大きなリニューアル点は、縦書き・右開きから横書き・左開きにしたこと。その理由は、今の教科書は国語以外は横書き・左開きが主流ということで、若い世代に親しまれるようにとのことからとのこと。そして、リニューアル後にアンケート調査を行い、「読みやすい」との回答が50%以上というのは、確実にリニューアルの効果が出ていると思う。



改選後、新たな委員での視察研修となった。

今回の視察先は両町ともコンクール入賞・受賞実績があり、学ぶべきところが多かった。特に、神河町は全面リニューアルをしてからの受賞で、確実に評価を得ていることがわかる。

委員会の開催回数は両町とも４回程度開催しており、綿密に打ち合わせが行われていることが伺える。

市川町が基本としているのは「コンクール審査基準」で、そこは当町も学ぶべきと思った。

神河町で挙げられた３点の課題については、当町も当然該当すると認識しており、これまで、町民の登場場面を増やすなどの改善は行ってきた。現在シリーズ化している表紙写真の「中学校の部活動」は好評を得ていることから、継続していきたいと思う。

改善点とすれば、

- ・見出しのインパクト
- ・ページごとのレイアウト
- ・ページ内の構成・流れ
- ・特集ページ

などが挙げられると感じているが、当委員会は、予算の関係上、ページ数が限られていることもあり、紙面のページ割り付け（順番）や記事にする中身の選択を再度検討する必要があると思っている。また、表紙に掲載している「目次」も全てを掲載する必要はなく、目玉となるもののみの掲載でよいと思った。

予算についても、例えば、「校正作業（読み合わせ）に印刷業者さんの同席をなくす」「編集ソフトを使って委員で編集を行い印刷のみ発注する」など、何か工夫ができないか検討していきたい。

視察研修終了後に振り返りを行い委員全員で意見を出し合い、住民に伝わり、読まれる「ひじ議会だより」となるよう取り組んでいきたい。



行政視察研修報告書

作成者氏名	森 昭人
視察先・視察日	兵庫県市川町・神河町 令和8年7月7日～9日
視察目的	「議会だより」のリニューアル
研修内容	
○市川町 市川町は、兵庫県のほぼ中央部、播磨地域の北部に位置し、人口約1万人、面積約82 km²の町である。町域の約7割を山林が占め、清流・市川を中心とした豊かな自然環境に恵まれている。また、「日本一のゴルフ場数を誇る町」として知られ、町内には多くのゴルフ場が立地しているほか、播州織や農業など地域資源を生かしたまちづくりを進めている。  市川町議会広報の概要 議会広報紙「いちかわ議会だより」は昭和57年に創刊され、編集・原稿・写真撮影は委員が主体となって担い、一般質問の記事は質問議員、委員会報告は各委員長が執筆するなど、役割分担が明確に整理されている。一方、議会事務局は校正や資料収集、原稿の取りまとめなど編集を支援する役割を担い、編集委員会が主体となる体制が確立されている。 編集工程についても、第1回委員会で掲載内容や紙面構成を決定し、第2回・第3回委員会で初校・再校の校正を行うなど、企画から発行までの工程管理が体系化されていた。また、校正と並行して次号の表紙写真公募やインタビュー先、特集内容を決定するなど、継続的な編集サイクルを構築している点が特徴的であった。紙面づくりでは、町民インタビューや特集記事、一般質問の追跡記事、議会活動報告などを掲載し、単に議決結果を伝えるだけではなく、住民にとって関心を持ちやすい内容となるよう工夫されている。 さらに、表紙写真を公募するなど、町民が広報づくりに参加できる仕組みも取り入れられていた。一般質問については、質問項目数や文字数、見出し、写真の提出方法まで細かな編集基準を設け、読みやすさと紙面全体の統一感を確保していた。 市川町議会における議会広報の取り組み 市川町議会では、 「住民に『読まれる』広報を！一手に取り、伝わる広報を目指してー」 を基本理念に掲げ、議会広報を単なる議会活動の報告媒体ではなく、住民と議会との信頼関係を築くための情報発信ツールとして位置付けている。	

現在、議会広報紙「いちかわ議会だより」は年４回、A4判フルカラー24ページを基本として約4,500部を発行し、町内全世帯をはじめ、小中学校や公共施設等へ配布している。編集方針として特に重視しているのは、「すべてを掲載することはできない」という前提のもと、住民の関心が高い事項を優先的に掲載することであり、限られた紙面の中で、いかに住民に伝わる内容とするかを重視している。

また、紙面づくりにおいては、

- ・パッと見て内容が分かる見出し
- ・文字を減らし、写真やイラストを活用した視覚的な構成
- ・特集記事を中心としたメリハリのある編集
- ・表紙や巻頭・巻末を活用したインパクトある紙面構成

など、「直感的に見て分かる広報」を目指している点が特徴であった。

さらに、「住民参加の広報づくり」を重要な柱としており、町民インタビューや表紙写真の公募などを通じて住民の声を紙面に反映させ、住民が議会広報を身近に感じ、手に取るきっかけづくりを行っている。

編集体制は、議員、議会事務局、印刷事業者の三者が役割を分担しながら連携し、

- ・議員は原稿作成、校正、取材、写真撮影等を担当
- ・事務局は資料収集や原稿調整、文字起こし等を担当
- ・印刷事業者はデータ作成・印刷を担当

するなど、三位一体による広報づくりが実践されていた。

また、編集スケジュールも体系化されており、定例会前からインタビューや特集記事の準備を進めるほか、第１回から第３回までの編集委員会を通じて校正・レイアウト確認を行い、同時に次号の特集内容を決定するなど、計画的な編集サイクルが確立されている。特集記事については、「広報の目玉」と位置付けられており、

- ・３月号：予算
- ・６月号：議会機能
- ・９月号：決算
- ・12月号：一般質問

など、毎号テーマを設定し、議会活動を分かりやすく伝える工夫がなされていた。

【所感】

今回の視察研修を通じて、市川町議会では「読まれる広報」とは単に情報を掲載することではなく、「住民に伝わる広報」「住民とともに作り上げる広報」であるとの明確な理念のもと、議会広報に取り組まれていることを学ぶことができた。

特に印象的であったのは、「すべてを伝えることはできない」という前提に立ち、住民の関心が高い内容を優先的に掲載するとともに、写真やイラスト、簡潔で分かりやすい見出しを用いて、直感的に理解できる紙面づくりを徹底されていたことである。

また、町民インタビューや表紙写真の公募など、住民が広報づくりに参画できる仕組みを取り入れ、「議会が発信する広報」から「住民と議会が一緒につくる広報」へと発展させ

ている点は、大変参考になった。

さらに、議員、事務局、印刷事業者がそれぞれの役割を明確にし、計画的な編集スケジュールのもとで三位一体となって広報づくりに取り組む体制が確立されていることも、継続して質の高い広報を発行する上で重要な要素であると感じた。

議会広報は、議会活動を住民に説明する責務を果たすだけでなく、議会への関心や信頼を高める重要な手段である。今回の研修で学んだ「読まれるから伝わる広報」「住民の立場に立った紙面づくり」という視点を今後の日出町議会広報広聴活動に活かし、より多くの町民に手に取っていただき、議会を身近に感じていただける広報紙づくりに努めていきたい。

議会だよりは、単なる議会の記録ではなく、議会と住民をつなぐ「架け橋」である。今後は、住民参加型企画の充実や特集記事の強化、写真やデザインを活用した分かりやすい紙面づくりなど、「読まれる」から「伝わる」、さらには「議会への関心や参加につながる」広報へと発展させていく必要があると感じた。

○神河町

神河町は兵庫県の中央部に位置する人口約1万人の町であり、豊かな自然環境と観光資源を有している。近年は、住民との情報共有や情報発信を重視したまちづくりを進めており、議会においても「町民目線」に立った議会広報のリニューアルに積極的に取り組んでいる。



神河町議会における議会広報の取り組み

神河町議会では、令和6年7月発行の第81号から議会だよりを全面的にリニューアルしている。その背景には、「議会だよりが住民に十分読まれていない」「議会活動が伝わっていない」といった危機感があった。

リニューアルに先立ち、30代から50代の神河町商工会会員を対象にアンケートを実施したところ、「議会だよりを読んでいる」と回答した人は0人であった。また、令和7年度特別職等報酬審議会においても、「議員活動が見えない」「議会の活動が伝わってこない」との意見が示され、議員報酬についても「今後の活動を見極めて判断すべき」とされ、報酬は据え置きとなった。

さらに、従来の議会だよりについては、行政用語や議会特有の専門用語が多く、一般住民には内容が理解しづらいという課題も明らかとなった。

これらの課題を踏まえ、神河町議会では、

- ・ 誰にでも分かりやすい
- ・ 読みやすい
- ・ 親しみやすい

をコンセプトに掲げ、「町民目線」に立った紙面づくりへ大きく方向転換している。

具体的には、

- ・ 表紙や特集ページを充実させる
- ・ 写真を多用し視覚的に伝える
- ・ 住民の声や地域の問題を積極的に掲載する
- ・ 若い世代や子育て世代を意識した編集を行う
- ・ SNS(Instagram 等)を活用し、議会だよりとデジタル媒体を連携させる
- ・ 「議会から住民へ伝える広報」から「住民と議会をつなぐ広報」へ転換する

などの取組を進めていた。

また、住民アンケートでは、「文字が多い」「見づらい」「分かりにくい」といった意見が多く、読みやすさの改善が大きな課題となっていたことから、紙面デザインについても大胆な見直しが行われていた。

神河町議会では、議会だよりを単なる議会報告の冊子ではなく、

『あなたと議会をつなぐ議会だより』

として位置付け、議会への関心や親近感を高める媒体として再構築していることが大変印象的であった。

【所感】

今回の研修を通じ、議会だよりは「発行すること」が目的ではなく、「住民に読まれ、議会活を理解していただくこと」が本来の目的であることを改めて認識した。

多くの議会では、予算や条例、一般質問などを正確に伝えることに重点が置かれているが、その結果として専門用語が多くなり、住民にとっては難しく感じられる紙面となりがちである。

神河町議会では、住民アンケートを通じて現状を客観的に把握し、「町民は何を知りたいのか」「どうすれば読んでもらえるのか」という視点から抜本的な見直しを行っていた。

特に、

「議会目線ではなく、町民目線で伝える」

という考え方は非常に参考となった。

また、表紙や写真の活用、住民参加型の記事、SNS との連携など、従来の議会広報の枠にとらわれない取組は、議会をより身近に感じてもらうために有効であると感じた。

日出町議会においても、住民ニーズの把握に努めるとともに、議会だよりを「議会と住民をつなぐ媒体」として位置付け、分かりやすく、親しみやすい紙面づくりについて研究を進めていく必要があると考える。

今後の取り組み

今回の市川町議会及び神河町議会の視察研修を通じて強く感じたことは、議会だよりは「発行すること」が目的ではなく、「町民に読まれ、議会活動を正しく伝え、議会を身近に感じてもらうこと」が本来の目的であるということです。

市川町では、当初予算審議を分かりやすく特集し、住民生活との関わりを意識した編集が行われていました。一方、神河町では、住民アンケートにより「読まれていない」という現実を客観的に把握した上で、住民目線に立った紙面づくりへと大きく方向転換し、「読まれる議会だより」の実現に取り組んでいました。

両町に共通していたのは、「議会が伝えたいこと」ではなく、「住民が知りたいこと」を起点として編集している点であり、この視点は日出町議会においても大いに参考にすべきであると感じました。

私はこれまで16年間にわたり議会だよりの編集に携わり、編集委員長としてオールカラー化や創刊100号記念号の発行などに取り組んできました。今回、8年ぶりに広報チームの一員として編集に携わることとなり、これまでの経験に加え、今回の研修で得た知見を生かしながら、新たな視点で紙面づくりに取り組みたいと考えています。

具体的には、まず、専門用語をできるだけ分かりやすい言葉に置き換え、写真や図表、見出しを工夫することで、誰もが読みやすく理解しやすい紙面づくりを進めていきます。また、市川町の取り組みを参考に、3月定例会号では当初予算審議を特集として分かりやすく紹介するなど、町民の関心が高いテーマを積極的に取り上げていきたいと考えています。

さらに、今回の研修成果を編集委員会で共有し、市川町と神河町それぞれの優れた取り組みを参考にしながら、日出町の地域特性や議会活動に合った「日出町らしい議会だより」の在り方について議論を深めていきたいと考えています。

議会広報は、議会と町民をつなぐ大切な架け橋です。今回の研修を一過性のものとすることなく、編集委員会のメンバーとともに継続的な改善を重ね、町民に親しまれ、議会への理解と関心が深まる議会だよりの実現に向けて取り組んでまいります。

議会広報と議会の活性化

また、日出町議会では今年度から通年会期制を導入しましたが、その制度を十分に生かした議会運営については、まだ議長や議会運営委員会を中心とした議論が十分とは言えない状況です。通年会期制は導入することが目的ではなく、年間を通じて機動的かつ政策的な議会活動を展開するための手段であり、そのメリットを最大限に発揮できる運用について、今後さらに検討を深めていく必要があると考えています。

特に重要なのは、決算審査で明らかになった課題や改善点を、翌年度当初予算へ確実に

反映させる仕組みを構築することです。現在は、予算は予算常任委員会、決算は毎年設置される決算特別委員会で審査していますが、審査が一過性となりやすく、決算審査の成果が次年度予算へ十分につながっているとは言えません。このため、今後2年以内を目標に、予算と決算を一体的に審査する「予算決算常任委員会」の設置を提案したいと考えています。そして、9月の決算審査を踏まえ、12月定例会初日に次年度予算に対する提言書(意見書)を町へ提出し、その提言が当初予算にどのように反映されたのかを検証するサイクルを確立したいと考えています。

また、この取り組みは議会内部だけで完結させるのではなく、議会だよりでも積極的に発信したいと考えています。提言に至るまでの審査経過や主な議論に加え、議員一人ひとりが重視した決算審査のポイントなどを分かりやすく特集し、「議会が何を議論し、どのように次年度予算へつなげようとしているのか」を町民の皆さんに見える形でお伝えしていきたいと考えています。

私は前期の3・4年目の2年間、議会活性化特別委員会委員長として、議決事件の追加や議員定数2名削減の取りまとめをはじめ、議会報編集特別委員会を広報広聴常任委員会へ発展させる提案など、議会改革に取り組んできました。これらの改革は、議会の機能強化と町民に開かれた議会を目指すための第一歩であり、今後も継続して取り組むべき課題であると考えています。

今回、8年ぶりに議会広報に携わることとなり、市川町議会及び神河町議会での視察研修を通じて、改めて感じたのは、紙面のデザインやレイアウトだけを取り入れても、本当の意味での議会改革にはつながらないということです。重要なのは、議会改革によって生まれた新たな取組や政策提言、議論の過程を、町民の皆さんに分かりやすく伝え、議会への理解と信頼につなげることです。

議会活性化特別委員会が役割を終えた今、私は広報広聴委員会が単に議会だよりを編集する組織ではなく、議会改革を先導する役割も担うべきであると考えています。町民の声を広く聴き、その声を議会活動や政策提言につなげるとともに、新たな議会改革にも積極的に取り組み、その成果を分かりやすく町民へ発信していく。そのような「広聴 → 政策提言・議会改革 → 広報」という好循環を生み出し、町民と議会をつなぐ架け橋としての役割を果たせるよう取り組んでまいります。

行政視察研修報告書

作 成 者 氏 名	豊岡 健太
視察先・視察日	兵庫県市川町 令和8年7月7日（火） 兵庫県神河町 令和8年7月8日（水）
視 察 目 的	住民に「読まれる」広報紙の編集方針について（市川町） 議会広報紙の編集方法について（神河町）
所 感	

1. 兵庫県市川町

市川町の編集委員は6名で構成されており、発行部数は4,500部、「町民が参画する広報、手に取り読んでもらえる広報」を目指し、編集されている。

編集委員からは、「読まれない広報に価値は無い。伝えるだけでなく伝わる広報にする」という強い信念を感じられた。

余白を多めに取り、写真やイラストを多用することにより、非常に見やすく読みやすい議会だよりに感じた。予算の特集ページでは、町民が興味を持ちそうな事業をピックアップし、町民に「一言インタビュー」というかたちで、写真入りで登場してもらい、町民参加型の広報紙を目指しているとのこと。

コンクールの審査方針を基本とし、住民の関心が高い議案を優先的に掲載。一目で見える紙面作りで、見出しは簡潔、文字を減らし写真やイラストを多数用いていた。

印象に残ったのは、特集ページにおいて委員会や一般質問で議題となったことを「その後どうなったか」という追跡のページである。そこに「議員の一言」というかたちで議員の思いも掲載されており、また、矢印等分かりやすいリードで問題提起から現在の状況まで一目で分かる工夫がなされていた。

われわれの広報広聴委員会においても、いくつも取り入れるべき手法があったので、今後の議会だよりに役立てていきたい。



2. 兵庫県神河町

神河町議会においては、広報委員 5 名と事務局で編集作業を行い、発行部数は 4, 250 部。

これまでの議会だよりの課題として「読めない」「議会が身近に感じられない」「内容が難しく理解しづらい」の 3 つを挙げ、町民目線でリニューアルを行った。

写真やイラストを多く用い、町民参加型の紙面作りという点においては、市川町や日出町の編集方針と大きな違いは無いが、「今まではこうだった→こうしてみたら面白く読んでもらえるのでは」という、これまでの固定概念を取っ払ったところが、神河町の特徴であり、学ぶべき点であった。

具体的には、これまでの縦書き右開きから、横書き左開きへ変更し、紙面にリズム感を生むレイアウトに変えたこと。さらには題字採用者を、表紙をめくった次のページに 1 ページまるまる使って町民紹介をし、議会の内容が最初に来るという固定概念を取っ払ったことである。さらにインパクトがあったのは、表紙に町民が登場するのはよく見受けられるが、表表紙・裏表紙を使い、1 枚の写真を A3 サイズで採用している点である。

そういう点で、町民が手に取ってくれる仕組みづくりが随所に見られた。日出町の議会だよりに取り入れてみたいアイデアがいくつかあり、大変有意義な視察研修であった。



調査研究・政策提案事項

今回の両町の視察は、これまでなかなか読んでもらえなかった議会だよりをどうにかして町民に伝えようとする熱量を感じた。

やはりコンクールで優秀賞を受賞する議会だよりには、「インパクトがあり、すっきりして見やすい」という共通点があると感じた。これまでの視察を踏まえ、日出町議会だよりもさまざまなリニューアルを行ってきており、少しずつ読みやすくなってきていると自負しているが、今回の視察研修で、まだまだ改善点は多くあると感じたと同時に、紙面改革には終わりが無いと新たに痛感した。

また、市川町議会から日出町の議会だよりの良いところを逆に取り入れさせて頂きたいといった意見もあり、やはり他の自治体の議会だよりを見る機会をもっと増やさないといけないとも感じた。

今回視察に行った両町の良いところを取り入れ、さらに良い議会だよりの制作に取り組んでいきたい。

行政視察研修報告書

作成者氏名	岡山 栄蔵
視察先・視察日	兵庫県市川町 令和 8 年 7 月 7 日(火) 兵庫県神河町 令和 8 年 7 月 8 日(水)
視察目的	市川町 住民に「読まれる」広報紙の編集方針について 神河町 議会広報紙の編集方法について
研 修 内 容	
○市川町 テーマ 住民に「読まれる」広報を! 手に取り、伝わる広報を目指して ●広報の前提として 議会広報とは、定例会や委員会等の活動内容を住民に伝え、住民と議会の信頼関係を築くための情報発信のツール。 読まれない広報に価値はない!伝えるだけの広報ではなく、住民に「伝わる」広報にする! ●手に取り、伝わる広報づくり (コンクール審査基準が基本に) 1 全てを伝えるのは無理という前提を忘れない。住民の関心が高い議案等を優先的に掲載 2 パツと見て分かる紙面づくり、見出しは簡潔かつインパクトを、文字を減らして写真やイラストを増やす 3 住民参加の広報づくり(インタビュー、一言コメント、表紙写真、題字)住民の声を届け、読むきっかけを与え、住民の立場に立って広報を作成! ●発行までの流れ 広報委員:校正、表紙写真撮影、インタビュー等 各常任委員長:委員会ニュースの作成 特別委員長・委員:特集記事の作成等 各議員:一般質問や意見書、討論等の関連原稿の作成 事務局:素案作成、各所調整、インタビューの文字起こし 印刷所:データ作成、印刷 「三位一体を心がけて広報づくりに取り組んでいる!」 ●委員会は3回開催 念校:議長、委員長、副委員長で最終確認 ●仕様 ・サイズ A4 版 4 色印刷(フルカラー) ・紙質 マットコート紙 70K ベース ・仕上げ A3 版 中折(綴じ穴 2 箇所) ・成果品は自治会世帯数ごとに仕分けして議会事務局に納品。・ホームページへの掲載を目的に、成果品の PDF データを 納品。 ・令和 8 年度予算 1,975,000 円 (全 24 ページ年 4 回) ☆ページ数は定例会報告、委員会報告、一般質問者数により 増減	

○神河町 議会だよりの取り組み

●議会だより概要

名称:議会だよりかみかわ

発行頻度:年 4 回(定例会終了後に発行)

発行部数:4,250 部(全戸配布)

編集体制:広報特別委員 6 名+事務局

編集期間:1 か月程度

●発行までの編集の流れ

委員会 4 回+最終確認 1 回(正副委員長のみ)計 5 回

- ・1 回目 定例会初日記事掲載内容検討・記事分担・委員会開催日の確認
- ・2 回目 定例会最終日委員の原稿、レイアウト等を簡単に確認
- ・3 回目 2 回目の 2~5 日後事務局作成ゲラを校正
- ・4 回目 配付日(毎月 25 日)の 10 日前印刷会社作成ゲラ①を校正
- ・最終確認(正副委員長のみ)配付日 1 週間前印刷会社作成ゲラ②を校正

●課題は 3 つ

1 議会だよりが読まれていない

・リニューアル前、神河町商工会会員(30 代~50 代男女)にアンケート毎号読んでいると回答したのは 0 人

2 議会が身近に感じられない

・R7 年度特別職等報酬審議会の答申

・議員の活動が見えない

・議会の活動が伝わってこない→議会だよりを発行しているのになぜ?→報酬増は今後の活動を見極めて対応すべき(R8 年度は報酬据え置き)

3 内容が難しく理解しづらい

・行政、議会の専門用語は一般の町民は分からない

●町民目線でリニューアルした議会だより

・2024 年(令和 6 年)7 月発行の第 81 号からリニューアル

・コンセプト「誰にでも分かりやすい、読みやすい、親しみやすい」町民目線で分かりやすい紙面づくりを意識

☆親しみやすさ UP☆読みやすさ UP☆町民と一緒につくる☆Instagram の活用等

※詳細はサイドブックス参照

●町民目線でリニューアルした結果

50%以上が読みやすいと回答

●苦労点

・今までの考え、固定概念をどう取っ払えるか、作成スケジュールや広報委員の負担増加。

町民の関心喚起、読んでもらえるように見せ方の工夫等。

研 修 結 果

今回の研修では、市川町及び神河町の議会広報の取り組みを通して、「住民に読まれ、伝わる議会広報」のあり方について学んだ。

市川町では、「読まれない広報に価値はない」という考えを基本理念とし、議会広報は単に議会活動を報告するものではなく、住民との信頼関係を築くための重要な情報発信ツールであることが強調された。そのため、すべての情報を掲載するのではなく、住民の関心が高い議案や話題を優先して掲載し、見出しは簡潔で分かりやすく、文字を減らして写真やイラストを効果的に活用するなど、手に取って読みたくなる紙面づくりを実践していた。また、住民インタビューや一言コメント、表紙写真など、住民参加型の紙面づくりを取り入れ、住民目線を意識した広報編集を行っている点が印象的であった。さらに、広報委員だけでなく、各常任委員長や議員、議会事務局、印刷業者がそれぞれ役割を分担し、「三位一体」で広報を作り上げる体制を整えていることも大きな特徴であった。

神河町では、議会だよりが十分に読まれていないことや、議会活動が町民に伝わっていないという課題を分析し、令和6年から「誰にでも分かりやすい・読みやすい・親しみやすい」をコンセプトに全面リニューアルを実施した。専門用語をできるだけ避け、レイアウトやデザインを見直すとともに、InstagramなどのSNSも活用し、幅広い世代への情報発信に取り組んでいる。その結果、アンケートでは半数以上が「読みやすくなった」と回答するなど、一定の成果が表れていた。一方で、従来の固定観念を変えることや、広報委員の負担増加、より魅力的な紙面づくりへの工夫など、多くの課題もあることが紹介された。しかし、「住民に読んでもらうこと」を最優先に考え、改善を続ける姿勢は非常に参考になった。

今回の研修を通じて、議会広報は議会側が伝えたいことを並べるのではなく、住民が知りたいことを分かりやすく伝えることが重要であると改めて認識した。今後は、本町の議会だよりにおいても、写真や図表を効果的に活用し、見出しやレイアウトを工夫するとともに、住民参加型の企画やSNSとの連携なども検討しながら、より多くの町民に読まれ、親しまれる議会広報の実現に努めていきたい。

行政視察研修報告書

作 成 者 氏 名	今宮 明
視察先・視察日	兵庫県市川町・神河町 令和 8 年 7 月 7 日・8 日
視 察 目 的	住民に読まれる議会報づくり 議会報編集の取り組みについて
研 修 内 容	
【兵庫県市川町】 議会報編集委員会 6 名の委員で構成され、『町民が参画する広報、手に取り読んでもらえる広報づくり』を編集方針として、年 4 回の定例会ごとの発行を基本としている。 『読まれない広報に価値はない』という信念のもと、住民に伝わる広報を目指し、従前の構成からレイアウトを一新し、コンクール審査方針である 5 つの指針を基本にした議会広報づくりに専念し、令和 7 年度町村議会広報コンクールで優良賞（第 10 位）に輝いている。 編集委員会は 3 回で、3 回目の委員会で次号の特集等の決定をしている。 各号の掲載内容はもとより、各編集委員会の流れや一般質問の取り扱い、写真の収集方法まで細かくマニュアル化していることが特徴的であり、議会報編集委員だけでなく、原稿を作成する議員、事務局の意思統一を図り作業の平準化を図っている。 多くの住民に読んでもらうため、住民の関心の高い議案等を優先的に掲載し、色使いや文字を減らし写真やイラスト等を多く活用して直感的に見てわかる広報づくり、住民の声を多く取り入れ住民参加型の広報誌など、多くの工夫が見られた。 とりわけ、予算の特集ページでの各議員が注目する事業の掲載とその事業に対する町民の一言インタビューの掲載は、日出町でも取り組んでみたいと感じた。 【兵庫県神河町】 広報特別委員 6 名で構成され、『議会だより かみかわ』第 84 号が第 46 回兵庫県町議会広報誌コンクールで初めて優秀賞を受賞し、令和 7 年度町村議会広報コンクールで奨励賞を受賞した。 編集作業は、委員会 4 回と委員長、副委員長による最終確認の計 5 回で行っている。 議会だよりに関するアンケート調査を実施し、「読まれていない」「身近に感じられない」「内容が難しく理解しづらい」という課題を把握し、町民目線で分かりやすい紙面づくりを意識し、「誰にでも分かりやすい、読みやすい、親しみやすい」をコンセプトに令和 6 年 7 月発行の第 81 号から大幅リニューアルを図った。 読みやすさ向上の取り組みとして、フルカラー化やフォントの変更、写真・イラスト・図などを多用し、文字数を減らすなどの努力を行った。また、町民参加型の広報誌づくりや特集記事で町の課題や議会の仕組みなどを詳しく解説した。 とりわけ、若い世代に親しまれるよう、これまで縦書き右開きだったのを横書き左開きに変更したこと、また、町民の関心を引くために表紙と裏表紙の A3 サイズで 1 枚の写真を大胆に使用したことは画期的である。 それまでの固定観念を取っ払い刷新していくことは、大変な努力と苦労があったと思う	

が、読んでもらえる広報、関心を持ってもらえる広報誌づくりには大変重要なことだと感じた。

研修結果・政策提案事項等

今回の視察で一番感じたことは、住民に読んでもらえる議会報を作るという、両町の編集委員と事務局の意識の強さと熱量です。せっかく作成した議会報を「手に取り、読んでもらう」ということが一番の課題です。両町とも、その課題に向き合い、解決に向け努力をしているところは見習うべきところが多かった。

特に、市川町が作成しているような作業マニュアルは必要だと感じる。経験や知識に関らず、誰が委員になっても対応できるよう細かなところまで整備されたものを早急に作成することが必要だと思う。

両町の読みやすく伝わる広報のいいところを取り入れながら、日出町の議会報も根本的なレイアウトや構成の見直しが必要だと思う。

日出町議会や議員一人ひとりの活動が住民の皆さまに関心を持ってもらえるような議会報づくりを目指して取り組んでいきたい。

行政視察研修報告書

作 成 者 氏 名	佐藤 孝介
視察先・視察日	兵庫県市川町 令和8年7月7日 兵庫県神河町 令和8年7月8日
視 察 目 的	住民に「読まれる」広報を！手に取り伝わる広報の編集方法について (市川町) 誰にでも分かりやすく、読みやすい、親しみやすい編集方法について (神河町)

研 修 内 容

1. 兵庫県市川町

議会編集委員会は6名で構成されており任期は2年務める。住民に「読まれる」広報を！手に取り、伝わる広報を目指して発行をされています。広報の前提は、住民と議会の信頼関係を築くための情報発信のツールであり、読まれない広報に価値はないという信念を持ち作成をされておりました。

内容としては、すべてを伝えるのは難しく、町民の方の関心が高い議案等を優先的に掲載しているという点とパツと見てわかる紙面づくりで、見出しは簡潔にかつインパクトを必要とし、文字数を減らして写真やイラストを重視し、すぐく見やすい議会だよりになっていました。

また、住民参加型の広報づくりを行っておりインタビューや一言コメントをいただいたりし議会だよりの中に町民の方の意見やコメントを掲載した議会だよりになっていました。特に予算特集のページに関しては、総額だけを伝えるのではなく町民の方が興味ありそうな予算をわかりやすく掲載しています。

今回私が感じたことは、議会だよりが議員からの一方通行ではなく、町民参加型により町民と共に創っているということでした。町民に有益な情報誌として作成されていました。

今後、日出町議会だよりにも参考になりました。



2. 兵庫県神河町

広報特別委員会6名+事務局で編集、作成を行っている。令和6年7月に議会だよりを全面リニューアルしている。

課題が3つあり、議会だよりが読まれていないこと、議会が身近に感じられないこと、内容が難しく理解しづらいがありました。議会だよりを読んでいるか神河町商工会会員にアンケートを実施したところ毎号読んでいる人は0人だったとのこと。それではいけないということで、町民目線で伝える、町民（声）を取り上げる議会だよりにするためにリニューアルをしました。コンセプトは、「誰にでも分かりやすい、読みやすい、親しみやすい」紙面づくりを意識していた。市川町同様に読みやすさをUPするために、写真やイラストを多くし若い世代の方にも読んでいただける工夫を行うことや、専門用語や疑問の解説を盛り込むことにより読みやすさの向上を図っていた。

今回私が感じたことは、市川町同様に町民に読んでいただくために、親しみやすさを持ってもらうための工夫がされている点がとても新鮮でした。表紙をA3サイズで1枚の写真を使用することや、縦書き、右開きを横書き、左開きにする工夫など若い世代にも親しまれるようにし町民と議会をつなぐ議会だよりの作成に取り組まれており、とても勉強になり今後活かしていきたいと思います。



研修結果・政策提案事項等

今回の視察研修では、両町とも町民の方にいかに読んでいただくか、を中心に特集内容や紙面を工夫していた。そして、議会だよりが町民に議員がどのような活動をしているか、開かれた議会を知っていただくために必要な情報ツールだということを改めて認識しました。両町ともにコンクールに入賞していることもあり、議会だより作成への思いやかかわり方が勉強になりました。町民に読んでもらえる、議会を知っていただけるように今後も編集に取り組んでいきたいと思っています。